

漂流物のファミリア

貴志部 矢賀

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼らは漂流物といわれている。彼らの一部は「ヘスティア・ファミリア」というファミリアの本拠である廃教会に集結した。

目次

漂流物のファミリア	1
白兔と聖女	5
白兔、燃える	9
火を畏れ給えよ	14
アストレアレコード	19
アストレアレコード	23
功名餓鬼と高潔エルフ	

漂流物のファミリア

「ヘスティア・ファミリア」には妙な連中がいる。廃教会にて出現した【漂流物】と呼ばれる者たち。彼らはオラリオをひっくり返しかなない力を持っている。力、知略、知識、それら全てがオラリオやそれが存在する世界をひっくり返しかなないものである。今分かっているのは【島津豊久】や【織田信長】それに【那須与一】に【安倍晴明】等々。彼らは【ファミリア】を育てた。そのおかげで規模は中堅、そして戦力は対人ならば【ロキ・ファミリア】よりも強いとされている。【量よりの質】そんな時代に量と戦術で勝負をしかけ、ほとんどの勝負に勝っているのだ。【ソーマ・ファミリア】に【アポロン・ファミリア】等々、彼らが滅ぼしたファミリアは中堅、零細、最大ではないにしろ大きなファミリアでさえも彼らに滅ぼされた。彼らはオラリオの法ではなく自分の法で動く。ギルドでさえも何度罰則を課したのか、それでも彼らは止まらない。まあ、団長である豊久が止まらないだけではないがもう、ギルドは諦めた。【ヘスティア・ファミリア】担当の【エイナ・チュール】というハーフエルフの胃が死にかけているだけだ。胃薬を常備して、常に虚ろな目にいるだけである。

今は【アポロン・ファミリア】の本拠を改装してそこを拠点にしている。そこで色々と信長やヘスティアや豊久に救われた人々が仕事をしている。大体、豊久は救った人のうちの一人である【リリルカ・アーデ】を連れてダンジョンに潜っていることが多い。鍛冶師を抱え、魔術師を抱え、弓師を抱えている。かの【勇者】よりも頭のキレが良い織田信長や【ハンニバル・バルカ】に【スキピオ・アフリカヌス】。弓使いの中で最高の腕を持つ那須与一。【万能者】と同じかそれ以上の物作りの腕を持ち、陰陽術を使いこなす【安倍晴明】。なんとなく、そこにいて外交担当の【サンジェルミ伯】。他のファミリアには【ポセイドン・ファミリア】に【山口多聞】と【菅野直】がいる。そんなところだろう。ちなみに【廃棄物】は存在しない。

豊久の太刀は【不壊属性】を付与された一級品だ。しかもそれが何本か用意されている。与一は何よりも弓の腕が立つ。爆薬等々、そん

なものがあると与一や弓を使うエルフ衆の価値は高くなる。信長や数少ないヒューマンの衆は銃を使う。火縄銃などとは違う、完全な近代の武器である。ドワーフは豊久と共に突貫するのだ。死んでも誉れ、そんなふざけたような、狂ったような思考をして笑っている。全ては頭領である豊久のせいである。うん、島津って怖いね。

取り敢えず彼らが遠征でやることは信長やスキピオが中心になっての全体の指揮。ドワーフは豊久が、弓を使うエルフ衆は与一が、後衛である魔術師や治療師にヒューマンは信長とスキピオが直接指揮をとる。

モンスターにだって感情はある。恐怖はある。モンスターに前衛や中衛、後衛はない。理性のないモンスター相手に人間の策が通じないか？否だ。いつだって人間が勝ってきたのはそれがあるからだ。知識によって全てを貪欲に集め続けて発展してきたからだ。神に依存した世界で一貫して人であることに傾倒し続けた。それが彼らだ。『ヘスティア・ファミリア』だ。

彼らと共同で遠征する物好きなど存在しない。しかし、時期が被ることはある。総大將は『島津豊久』だ。周りはその豊久に振り回されるだけなのだ。

目の前から『フォモール』の群れが迫り来る。ダンジョンの『深層』である四十九階層。目の前には島津十字、甲冑を着込んだ武者を先頭とする集団が目にはいる。人間を殺す、そんな単純な思考を、深層の住人であるから上層以上に知能を持つモンスターは存在しない。勝ち続けているから、強いから感情が失せて殺すことしか考えない。

後衛では詠唱が始まる。弓に矢をつがえる。スコープを覗く。肩に太刀を乗せる。

大きな音だ、銃声が鳴り響く。

『ヴォッ!?!』

眉間が貫かれる。モンスターとて人型、脳のあるそこを突かれれば容易く死ぬ。生き物を殺すならば脳を潰せばいいのだ。頭蓋ならば通せる。恐怖はなけれど動揺はある。だからこそ、彼らはそこを狙っている。

「オオオオオオオオオオオオッ!!」

人の声とは思えない雄叫び。それがフォモールの首を容易に刈り取る。それに続くドワーフ衆が次々に首を掻っ切ることを狙う。足並みが崩れたフォモールがそれに対応できない。

『ヴォッ』

『ヴァッ』

「トヨオッ!」

「応っ」

散開する。無論、それは巻き込まれないためだ。逃げた、そう認識してフォモール達は追撃しようとする。否か、追撃しようとしたのだ。砲撃、そんなものが雨のように降り注ぐ。追撃しようとしても、本能的な恐怖が勝る。簡単に、フォモールは全滅する。

「うわあ、今回も私の出番なかったなあ」

「それだけアイツらが優秀なんだよ」

信長の指揮する銃部隊。スキピオの指揮する魔術師部隊。豊久の指揮するドワーフ部隊。それらによって簡単にモンスターは死ぬ。しかし、ここはダンジョン。じっとしては消耗するだけ。五十階層に向かうことになる。

「な、なんだあつ。あれ」

信長の言葉である。彼が見る奥にあるのは緑であった。壁を、天井を埋めつくしている緑色の芋虫。

「ハッハー、すごい数じやのう!」

「あれは『ロキ・ファミリア』の野営かな。どうします? 信さん」

「話し、聞くしかねえだろうよ。あれは多分ウラノスの言ってたやつだ」

細かいことは分からないとかの神は言った。調べてきてくれとかの神は言った。遠征になぞらえてそれを調べに来たのだ。

「私が行ってきましようか?」

与一が言う。与一ならば、適任だろう。遊撃も弓の腕も、俊敏も全てにおいて現在の第一級冒険者に劣っていない。

「あ、ああ。頼む」

信長はそう判断する。

それはいきなりやってきた。下の階層から続く階段から、緑色の巨大な芋虫が現れたのだ。フィンなどの「ロキ・ファミリア」の幹部陣は「ハイエルフ」であるリヴェリアを除いて「ディアンケヒト・ファミリア」からの「冒険者依頼」を受けて五十一階層にある「カドモスの泉」より泉水を持つてくるために幹部のみで下の階層に向かったすぐあとだった。そしてオラリオ最高の弓取りが現れたのは少し経ったあと、幹部が戻ってくる直前のことであつた。

「リヴェリア殿」

女とも男ともとれない声。リヴェリアはその声に覚えがある。

「与ー！」

「アレはどんなもので？」

リヴェリアは齒噛みするが芋虫のことを与一に洗いざらい話す。体内に酸が貯まっていること、死ぬ際に自爆すること。簡単なものであるが良いものであると信長にそれを報告する。そのついでにフィンたちのことも話す。

「で、あるか」

そして、信長は悪魔のような笑みを浮かべる。

白兔と聖女

レベル1とは「神の恩恵」を貰った直後、または器を昇華させるような偉業をなしていないものを指す。世間一般的には「新米冒険者」と呼ばれ、冒険者の中でも一番下のものたちのことだ。しかし、そんなレベル1と言われている者が「ファミリア」の団長をやっている「ファミリア」が中堅に存在する。言わずと知れた、戦争で負けることはありえないとされている、オラリオの問題児「ヘスティア・ファミリア」だ。その団長である「島津豊久」は未だにレベル1であつた。そんな「ヘスティア・ファミリア」が遠征に出かける一日前のこと。「エイナきーん!!」

白髪の少年、純新無垢な田舎者。そんな印象を与える「ベル・クラネル」がギルドにて彼が初めてギルドを訪れた際に対応してくれた「エイナ・チュール」に大声で嬉しそうに呼びかける。その後ろにはなにやらエイナに撮つて見覚えのある女神がいた。

「あ、ベル君。「ファミリア」は見つかった、つて神ヘスティアア!」
ロリ巨乳にツインテール、女神に自墮落等、属性山盛りの女神「ヘスティア」がベルについてきていたのだ。彼女の目もまた、虚ろであつた。

「えつと、まさか。ベル君「ヘスティア・ファミリア」に?」

「はい!そうです!」

「ああ、神ヘスティアこちらに」

「ああうん」

純新無垢な笑顔を他所にエイナはヘスティアを近くによびよせる。

「何やってるんですか、神ヘスティアっ!」

「だってしょうがないじゃないか、あの子が困ってたんだからさ」

「それは、そうなんですか?」

ベルのファミリア選びはまだ初日であつた。故に進捗をエイナは知らない。

「大体のファミリアから門前払いくらつたんだってさ」

「ええっ、いやまあそれは分かりましたけど」

「ボクも気乗りはしなかったんだけどね、放っておけなかったんだよ」
問題児だらけの「ヘスティア・ファミリア」に入ったらどうなるか？魔術師はハンニバルに木苺を与えることを義務だと思おうようになり、弓士は語尾にゲンジバンザイと付けるようになり、ドワーフは笑って死ぬるが普通と普通のパーティーからは絶対に受け入れられないようになり、ヒューマンは大体本拠に籠もる。オラリオ全体から見ても【異端】と位置づけられ、同胞を大切にすると評判のエルフから少し距離を置かれている。ちなみにハイエルフへの敬意など一切ない。

そんな【家族】というより【組織】としての側面が強いとともにかなり結束力があるあの【ファミリア】に行けば絶対ベルは悪影響どころか、豊久に染めあげられるかもしれない。そんな懸念は当然のことにエイナとヘスティアの脳内に浮かび上がる。

「ミアハ・ファミリア」とかマシな所あったじゃないですかっ」

「いやあ、うん。それは思ったんだけどね」

あそこはあそこで魔境になっている。この世界に【廃棄物】はいないが、元なら存在する。「ミアハ・ファミリア」ならば【アナスタシア・ニコラエヴァ・ロマノヴァ】である。「アストレア・ファミリア」ならば【土方歳三】がいる。ジャンヌとジル・ドレエはどこにいるかは知らない。存在することは知っているが。黒王？いまなら立川でバカンス楽しんでるんじゃないですか？

「あそこはあそこでなんとなく悪影響ありそうでさ」

「貴方のところよりはマシでしょうっ!？」

「言うねえ、事実だから何も言えないな」

いつもの苦労をヘスティアにぶつけているようにも見えるが、それを疲れたような笑みでハッハッハ、とヘスティアは受け流す。

「となると、一年後。染まるには十分じゃないですか。馬鹿なんですか?」

「おっと、心は硝子だぞ」

「知りませんよ。日頃バイトしてて苦労から逃げているあなたがよく言いましたねえ……!」

事実としてヘスティアは仕事を全ては信長や童貞役人に押し付けている。

「ボクとしても後悔してるのさー!」

「してても行動しちやってる時点で駄目なんですよっ!ベル君は近年稀に見る純粋な子なんですよっ!」

「ええ……。キミ、ベル君に肩入れしすぎじゃないかい?」

「癒しですから」

キリツ、とされても困る。そんなことをヘスティアは思うが口には出さない。豊久もある意味純粋ではあるのだが、それが首取りに振り切っているのだ。

「ま、まあ受理はします。しますけど、絶対に」

「分かってるってば」

エイナとヘスティアは苦労人仲間である。それが故に、かなり仲がいいのだ。巷ではエイナとヘスティアのカップリングができているらしい。いや、なんで?

「エイナ君。ボクからも相談があるんだ。あ、ベル君は先に帰っててね」

「あ、はい。分かりました!」

「よし、個室に案内してくれ」

「え?ああ、はい」

ヘスティアはエイナと共に個室に入っていく。ベルの「スティタス」についての相談なのだが、やはり良からぬ噂もたっていく。

ベル・クラネル

L V 1

「力」 I 0

「耐久」 I 0

「器用」 I 0

「敏捷」 I 0

「魔力」 I 0

魔法

【聖女の火】 これはかの救国の聖女のもの。邪悪なるものを焼き尽

くす役目は少年に託される。

スキル

【島津への憎悪】廃棄物として相対した男への憎悪。早熟する器によつて男を焼き尽くさんことを。

「……は？」

「そうだね、そんな反応になるよね」

いままで見たことも聞いたことも無いもの。エイナの常識にないステイタスであつた。魔法には詠唱式がなく、スキルも抽象的どころか意味がわからないものになっている。それに不穏なスキルである。【島津への憎悪】、これは豊久へのものだろうか。そうでなくともこの上なく物騒なものだ。

「誰かの影響なんだと思う。ベル君は心当たりがあるつて言つてたんだ」

幼い頃に助けられたのは鎧を着込んだ女性。その女性の名は「ジャンヌ・ダルク」といったそう。傍には大男【ジル・ドレエ】もいて、元々ベルの住んでいた村にいたのだという。夢を語れば彼女はいい顔をしなかつた。それでも、なりたいたいというならばと稽古をつけてくれることになったのだ。ジルとジャンヌ、二人の扱きはベルに新しいものを見せてくれたのだという。

「それによつて発現したのが」

「これつてことだね。頭痛くなつてきた」

ベルが語つたのはジャンヌの操る炎の恐ろしさ。上手く火力を調整していたようだが、本気でやれば人やモンスターなど容易く灰にかえすような威力でつたらしい。

「これは秘匿しましょう。ええ、その方がいい」

「うん、そうだね。まだノブにも言わない方がいいかな」

「あ、そういうえばベル君の訓練は誰がやるんです？」

「え？うーん、確か豊久くんだったかな。……あ」

「アホおおおおおおっ!!!」

ヘステイアがやつちやつた的な反応をすると、エイナの絶叫がギルドを包む。無論、エイナは上司に怒られたとき。

白兔、燃える

早朝にヘスティアを起こしたのは義務感であっただろう。

苦労と胃痛から逃げるためにバイトの掛け持ちをしているため、朝早くから本拠を出るためである。

今日は遠征の日であることは覚えているので今日のバイトを終えたら童貞に仕事を押し付けてゆつくりするぞ、と部屋を出た。

そんな時であつた、中庭から聞こえたものだ。

豊久の声とベルの声、鍛錬によるものであることなど簡単にわかるものだった。

なにか気になって窓を開けて覗くと、中庭から煙がたっているのが確認できる。

「はっ？」

自然とそんな声が出てくる。

植物が生い茂っている本拠の中庭、そんな場所で豊久とベルはなんでもありの殺し合いを行っているのが見えたならそりゃあそんな声が出てくるだろう。

「見たことあるのう！お前もそんな妖術使えつどか！」

「シマヅう、シイツ!!」

ジル・ドレに渡された大槍にジャンヌの炎、それらを受け継ぎ豊久への豪快な一撃をくり出す。

土が抉られ、火を纏った槍の攻撃はさらに広範囲なものに昇華している。無論、ただの炎も攻撃手段に入る。

「かアアアッ」

口から湯気のように、煙が湧いて出てくる。

ベルは小柄で、ヒョロい見た目だ。

だから数多のファミリアを巡ってもファミリアに入れてもらえなかった。

城壁すら意に介さない程の大槍を持っていても外見での第一印象とは絶対的なものなのだ、これは【ロキ・ファミリア】でも同じこと。しかし、実際はどうだっただろうか、自分の扱うものの使い道をわ

かり、貰ったものを最大限に活用して見せている。

その上で目の前の首を刈り取ろうと、感情のままに動き、浄化の炎を身から湧き出させている。

『ベル、これは怨嗟による炎じゃない』

そんなジャンヌの言葉があつた。

ベルは以前のジャンヌを本人の口から聞いていて、無論質問した。

誰かを恨んで、それで出せるようになったんでしょ？と。

それに対してジャンヌは微笑みをもって答えた。

『その時はね。今は違う』

島津を燃やしたい、そんな気持ちは当然あつた、今もあるけれどそれではダメだと気づいたのだという。

なぜ？いつ？そんなことは聞けなかった。

その顔は歪んではいなかったがそれでも悲痛なものであると幼いベルでもわかったから。

『じゃあね、ベル。オラリオでも元気にやるんだよ』

『ベル、良き旅を』

村から出る馬車。その見送りに来てくれたのは村の住人に加えてジャンヌとジル・ドレ。

二人によつて鍛え上げられた肉体とジルの大槍にジャンヌの西洋剣、それらを携えて馬車の中で眠りについたのを覚えている。

「フウウツ」

足を広げ、膝を曲げる。大槍を肩に担ぎ、豊久との戦闘によつて破れた服はどうでもいいと空いた左腕に炎を収束させる。

「燃やす！」

「こいは稽古じゃ。首取りはせんど」

炎はベルに効かない。

だから、燃え尽きるほどに全身を炎に巻いてもベルには何も影響がない。

死に向かつてまっしぐらに突撃する。

炎に巻かれて深紅の瞳と白い髪が特徴的なベルも憤怒の形相となつて印象が百八十度変わる。

それを見ての豊久の反応は、笑っている。

「恐ろしか術を使うのう」

防戦一方、ヘスティアから見たらそれはそう見えることだ。

ベルの魔力が尽きることはまずない、そしてベルの周りには常に炎が纏われ、槍にも同じものが付与される。

難攻、そんなものではないのが今のベルだ、普通なら逃げることを最優先に考える。

しかし、豊久は正気か？

豊久は正気であるがその思考回路は常に狂っている、戦に特化している思考をしている。

馬鹿ではないが馬鹿だ。

「じゃが、素人じゃの。なら、たやすか」

豊久にとつては戦ったことがあるようなものだ。

だから、恐るるに足りるものではなく倒せるもの。

そう豊久はベルに対して突出する。

気を失っていたのだろうか。

豊久と稽古をしていたはず負けたのか、と一瞬で状況を呑み込める。

「……んう？」

誰もいないのか、と自室でのベッドの上で目を覚ます。

腰に差していたジャンヌの西洋剣とジルの大槍は壁に立てかけられていたようだ。

しっかりと燃え尽きていた服は着ているようだ。

与一がやってくれたのだろうか、ありがたいことだ。

「ダンジョン行こう」

剣と槍を持つと本拠から外に出る。

一人で行くのは初ダンジョン、豊久に比べれば楽なものであろうと油断はしているっぽいが警戒心は持って挑む。

【青の薬舗】とは男神【ミアハ】が率いる医療系ファミリアである【ミアハ・ファミリア】の本拠である。

とある事情で団員が離れ、残るは元【廃棄物】である【アナスタシア・ニコラエヴァ・ロマノヴァ】と犬人である【ナーザー・エリスィス】である。

借金を同じ医療系ファミリアの【ディアンケヒト・ファミリア】に作っているが完済はしている。

理由は【ヘスティア・ファミリア】の遠征にアナスタシアが同行していて報酬を貰っているからである。

今もアナスタシアは遠征に出かけており、残っているのはナーザーのみである。

【ヘスティア・ファミリア】は全面的に【ミアハ・ファミリア】に協力しており、様々な【冒険者依頼】を請け負っている。

アナスタシアは【治療師】としても有名である。

何よりもその胸と幸薄そうな雰囲気が人気だ。

誰かいわくおっぱいいずじやすていす、らしい。よく分からないものである。

まあ、そんなことは閑話休題の話題に過ぎない。こんな話題書くなら、そうだ【タケミカツチ・ファミリア】のことも話すこととしよう。彼らは極東から出稼ぎに来た若者たちだ。【カシマ・桜花】に【ヤマト・命】それに【ヒタチ・千草】などがいる。

その中で異彩を放っているのはなんか信長に執着している金柑頭となんだか面白い方につく人。

金柑頭に関しては語ることは少なすぎる、というかない。

面白い方につく人、もう面倒くさいな【源義経】は特に変わり者である。

この人、まず強い。

速さでいえば易々と「女神の戦車」を超え、どんな手を使おうとも相手に勝つ、そんな思想も持っている。

与一いわく恐ろしい人であると。会っただけで冷や汗を流していた、それが故か彼は「ヘステイア・ファミリア」には入らなかった。まあ、そんなことは関係ないだろう、ただ自由に好き勝手に動きたかっただけ、なのだろう。

ベルの働きは豊久たちが遠征に出かけていても変わらない。

朝には火の扱いと大槍に剣の鍛錬を、そしてダンジョンに潜る。

そんな時に悲劇、というのが適当だろうか。

ベルは笑って対応したのだが、普通は悲劇なのだろう。

上層でのミノタウロスとの遭遇、レベル1では勝てないモンスターを目の前にベルはどうしていただろうか。

「良さげな相手だ。燃やしてやる」

上層の洞窟は狭い。

そこで炎を使えば他のパーティがいたならば恐らく死ぬだろう。

だから普段は自重しているのだが、昂る心の前ではそんなものは無意味。

それにこんな【異常事態】だ、パーティがいるはずもないだろう。

火を畏れ給えよ

少年の強さは半端なかった、精神も肉体も並の比ではなかった。火が洞窟を包み、火が少年と牛頭を包んでいた。

燃え尽きるであろうその熱量には第一級冒険者であろうと近寄れない。

そんな場所で戦っているのは恐慌状態で後にも前にも行けない詰んだ牛頭とその中で笑っている少年。

『ヴウウウツ!!』

半ば狂乱状態の牛頭は悪あがきとばかりに腕を振り回す。

少年は押し黙り、ただただ槍を腕に食いこませる。

炎とは生命の象徴、炎とは太陽を表し全てを照らしている。

ヘステシアの眷属になったのは宿命であつたのだろう、炉の女神たるヘステシアの元に聖なる火を届ける役回りとなつた。

モンスターという邪悪を燃やし尽くしちぎり落とす。

炉の女神の愛しい従僕、ただの火とはよく言つたものだ。

それをベルは肯定して喜んでヘステシアのために死ぬだろう。

「燃えろよ燃えろ」

紅い瞳は炎の中でも牛頭を見ている、それを牛頭はしかと分かっている。

だから怖いのだ、逃げてきた先でも相対したあの化け物共より異常な化け物がいるなんてとそしてもう逃げられないことを知つてしまっている。

『ヴウウウ、ヴモオオオオオオツツ!!』

「僕が仕えるのは炉の女神。なら僕の力が増幅するのは必然」

ベルは既にヘステシアを主として認めている。

ベルの師匠は神のために戦い、その末に人に殺された復讐者。

ならば神に仕えるは必然、神のために全てを尽くして、費やすのは必然のこと。

「不死鳥の如く舞い踊つてみせよう」

周りから炎が失せた時、ベルの身体から羽が生える。

流麗な、それはそれは神秘的なもの。

ベルの顔も身体も失せて純粋な火がベルの身体になる。

その概要は、分からない。

わかつてはいけないものだった。

「なんだア？ありゃあ」

それを見ていた外野も声を漏らす。

声すら漏らせない者もいるが、二人ともベルに魅入っていた。

なんだか、あの首狩りと同じようなそんな感じがしたのだ。

容易にミノタウロスの身体は裂かれる。

ただの一難で、魔石すら砕かれて、ミノタウロスは死ぬ。

戦闘終了、そう認識すると先程の殺気が嘘のように炎は収束して元のヒョロい白兔が現れる。

装備も初心者セットで腰にあるのはバックパックと支給品のナイフ。

目立っているのはやはり担いでいる長槍、左目の蒼炎であろうか。

「ああ、砕いちやったかあ」

灰の中に魔石は存在しないがドロップアイテムは存在する。

【ミノタウロスの角】それを見つけた時のベルの反応は初々しくて微笑ましいものであった。

それに一瞬動揺してしまう【ロキ・ファミリア】の第一級冒険者である【アイズ・ヴァレンシユタイン】と【ベート・ローガ】であったがベルがドロップアイテムを回収して帰る時に我に返る。

「ちよつと待って」

「はい？」

アイズが呼び止めるとベルは振り返る。

何故呼び止められたかわかっていない様子であったようなので説明するべきだろうとアイズはベートにそれを託す。

ベルは高揚感に溢れている、わけではなかった。

ミノタウロスは強かったし一度当たればベルが死んでいたのは確実であつただろうが半月で何故か新しいスキルが発現していたため、それによつて少しでも生きていたら回復できたのでそんなに危機感もなかった。

【異常事態】ではあつたため、報告義務はあるためにギルドへ足を運んだのだが、すぐさまエイナに個室に連れていかれた。

「ベル君」

「な、なんですか？」

エイナは机に肘をつけて指を絡ませてその上に顎を置く。

なんかどこかのマダオがやっていそうなポーズだが、真剣な顔をしたエイナがそれをやっているのが綺麗、や可愛い、が先行せずおつかないが勝るものになっている。

「私、言つたよね。いくら君が強くても相応の働きをしてねって」

「で、でもあれは【異常事態】でっ」

「うん、それはわかるよ。大変だつたよね」

うんうん、とエイナは二度頷く。

しかし眼光は鈍ることなくベルに突き刺さっているため縮こまつたままだ。

「でもね、私のことも気にかけて欲しいな」

「えっ？」

「ベル君が帰ってきてくれないと私の気が休まらないしベル君に厄介事持つてこられると胃が、ね」

「ええつと。……ああ、豊久さんですか。」

ヘスティアから教えられた豊久のトラブルメーカー具合は計り知れないものであつた。

狂奔、であつたか豊久の狂気に共に戦う者は魅入られていく。だからこそトラブルメーカー、いや薩摩兵子は伝染していく。おそらくベルもそれに魅入られているのだろう。

「……善処します」

「お願いよ？お願いねっ!？」

「ガンバリマース」

「目に光がないんだけどっ!？」

厄介事を持つてくるな、そんなものは無理な話である。

諦めよう、そう誓ってエイナには色々優しくしよう。

とまたまた誓う瞬間であった。

換金を終えてギルドを出る。

その後のこと、ベルは一直線に本拠ではなくヘステイアのバイトをしている屋台を目指して歩く。

「あ、ベル君」

「神様ー、帰りました!」

「おかえりー!じゃが丸くんはいるかい？」

「じゃあプレーンを一つ」

ヘステイアは熟練の動きでじゃが丸くんを揚げてベルに渡す。

朝昼、全てをじゃが丸くんに捧げてきたヘステイアのじゃが丸くんは絶品である。

どこぞの金髪じゃが丸くん大好き剣姫も通い詰めるくらいには絶品だ。

「今日って豊久さん達帰ってくる日ですよ。ダンジョンで【ロキ・ファミリア】の【剣姫】さんに会いました」

「アイズ君にかい？確かに予定は今日だけど、何かトラブルあったのかな」

先に【ロキ・ファミリア】が潜っているとはいえ「ヘステイア・ファミリア」の潜る速度は【ロキ・ファミリア】を容易く超える。

それにあの遠征は単なる調査のためであり、早めに帰還するのが予定であった。

まあ、ヘステイアにはオラリオに信長が勝手に延ばした斥候によって大体の情報は簡単にヘステイアの手に入るようになっていた。

それがまたヘステイアの頭を悩ませる要素になっているのだが関係ない話である。

「トラブル？」

「ん、いやなんでもないよ。ベル君は直ぐに帰るのかな」

「そうですけど、神様も一緒に帰ります?」

「そうしようか。そろそろバイト終わるし」

もう屋台を閉める時間だと店長にまで成り上がったヘステイアは屋台を片付けようとベルに手伝いを頼む。

無論、ベルはそれを断らずにそれを手伝った。

「……ああ、誰か手伝ってくれないかなあ」

本拠に残った童貞人間の過労によるその眩きは誰にも聞かれることなく無視される。

アストレアレコード

子どもが冒険者を道連れにして自決した。

敵が工業地帯から奪った撃鉄装置、そしてダンジョンでとれる火炎石、それらを組み合わせれば簡単な自爆装置の完成だ。

それでその爆発を合図に皆、自爆^死はずであった。

しかし、女は焦っていたのだ。

「なんで、なんで爆発しねえんだっ！」

焦っている声、冒険者は仲間の死に絶句していた。

そんな女の声など聞けていなかったに違いない。

馬鹿な、焦っていたのは何も現場だけではない。

指揮系統も、予期していなかった自決^{爆発}に混乱していた。

ある一つの派閥を除いての話であったが。

まだオラリオに来て間もない派閥、まだファミリアにすら所属していない漂流物たち。

彼らは予定調和だと、そう笑っていた。

白装束の拠点^は血の海であった、攻め入った者達のものではなく、元々いた白装束のものである。

服の内にあつた【火炎石】と【撃鉄装置】を見つけた時、その知らせを受けた時、魔王は笑った。

殉教者とはよく言ったものだ、自爆とはよく言ったものだ。

彼らは好んで死んでいく、家族に会いたいから、来世では幸せになれるようにと願いながら。

その面では男はそれと同じであつただろうか、否だ。

全く違う、全然違う。

男は死に行くのではない、勝つために死ぬのであれば大歓迎なだけ。

自分が死んでも子孫が勝つ、仲間が勝つ、そう馬鹿正直に信じているから笑っている。

「なんじゃ、女じゃなかか」

白装束の首を持った男が現れる。

島津十字の家紋、ただの功名餓鬼、大太刀を携えて男は現れる。
赤髪 of 白装束の指揮官、レベル5、ヴァレッタは絶句する。

落胆したような表情を豊久を見て、だ。

「ガネーシャ・ファミリア」が捕縛しているはずの同胞^{花火}の首が豊久の手に握られているのだから。

そして簡単に状況を飲み込んだ、この男に台無しにされたと。

恥ずかしさ？馬鹿にされたような怒り？全てが緋い交ぜになる。

その場において踊らされた冒険者など蚊帳の外、漂流者^{イザイルス}と闇派閥の睨み合い、など起こらなかった。

豊久は落胆した表情のまま、その場を去る。

女首は、子どもの首は恥であるから、敵の首は全員刈り取ったから。
ここは戦場だ、騙し討ちでも私刑《リンチ》でもサシでもなんでもあり。

声にならない怒声、それを掻き鳴らしてヴァレッタが突出する。

誰に？豊久にだ。

そんな激昂した相手、周りの見えなくなった猪、普段ならば当たられない物が当たるその時。

ストン、と軽快な音が鳴る。

「……ア？」

皮肉である。

矢とそれに付けられているのは導火線付きの筒。

中にはたんまりとオラリオに来るまでに作った黒色火薬^{たまくすり}が入れている。

抜こうとしても無意味、既に導火線はなくなり、火は火薬に届いている。

断末魔などはない、本来ならばそれが人の終わりだ。

「信さん、敵の指揮官を撃破。そっちは？」

『おう。順調よ、順調。自爆つてのは厄介だがいくらでもやりようはあるもんだ』

胸に巻き付けられた【火炎石】とそれを発火させる撃鉄装置。
それを封じるならば自爆する暇もなく殺すか腕を機能させなくし

てやればいい。

脳波でコントロールするだとかそんなハイテクなものはここにはないから簡単な思考でそこに至る。

【漂流者^{ドリフターズ}】は思考の差異者だと信長は言った。

自爆が知識にある、狂信者との交戦経験がある、様々な戦争を経験している、様々な知識を持っている。

無論、冒険者では経験できないものがそこに詰まっている。

モンスター相手ではない、人を殺す術を誰より持っているのが漂流者と呼ばれる人間である。

この場では確かに閻派閥に勝っている。

しかしながらここまで大規模な作戦を何故今やったのか、拠点を発見されたからにしては用意周到が過ぎる。

狙っているとしたか考えられない。

今この時を待っていた、駒が爆炎を上げて合図を出した今を待っていた。

ならば、これから何をする。

爆発だけではまだこちらの形勢は逆転できるかもしれない、完膚なきまでに戦意を喪失させるために何をする。

相手の保有戦力は不明、ならば何を出してくるかは分からない。

ラキアを攻め滅ぼし、オラリオにやってきた彼らは当然、この世界の情報を手に入れている。

それから想像するのは最悪なこと、閻派閥の保有戦力のうちに今のオラリオの戦力を押し包める者がいる。

雑魚は信長たちに任せてもらえれば滅ぼせる。

冒険者にはそんな大ボスを倒してもらいたかった。

そんな算段は簡単に崩れる。

【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】のもつ最高戦力の敗北が耳に届いた。

【重傑^{エルガラム}】と【九魔姫^{ナインヘル}】、そして【猛者^{おうじゃ}】の敗北。

台無しだ、全て。

丸つきり考えが台無しになった。

こんなこと想像こそすれどんな対策ができると壁を殴った。

激昂して周りを見えないようにすれば火薬矢で死なないまでも傷は与えられる、しかし余裕こそすれ油断なんてこれっぽっちもないじゃないか。

一が大きすぎる、もつと小さくても罰は当たらない。

押し包む、不可能。

一騎打ち、不可能。

火薬、不可能。

爆撃、不可能。

陰陽術、不可能。

考えうる全ての可能性が却下されていく。

即興で豊久をファミリアに入れたとして、勝てるかどうかは分からない。

詰み、チェックメイト。

ヴァレッタ一人潰したところでこの状況は変わりはない。

退くことさえできないのだ。

諦めかけたその時である。

敵の首魁であるエレボスの声が聞こえた。

アストレアレコード 功名餓鬼と高潔エルフ

死の七日間が始まる。

都市を押さえられた、市壁を押えられた、市民荷物を持たなければならぬオラリオは劣勢を強いられた。

【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア」、かつての最強の生き残りの二人が闇派閥イヴァイルスに与してしまったことによって絶望が深まる。

闇派閥の嫌がらせは頻度を増していた、市民を狙って、冒険者を狙って、少しの消耗を重ねさせようと嫌がらせを重ねていた。

その中で幹部が出ることはなかったが自爆装置を備えていたため、厄介さはこれまでより段違いのものである。

無差別のもの、読めるはずがなかった。

銃声、きつかけは闇派閥の襲撃であった。

火炎石とよばれる爆弾のような道具、それを装備した自決装置、そして眉間にあるのは風穴。

曰く、また家族を殺させるのか、狼藉を許すのか。

なぜそんなことを許せようか、冒険者では倒せなかった、しかし恐れる必要はないだろう。

親しいものは死んだ、次はお前だ。ならばめそめそと地べたに這いつくばって醜く命乞いをして死ぬのか。

恩恵ドを受けていない俺たちスは戦っているぞ、俺たちと一緒に戦っているエルフやドワーフ、ヒューマンも恩恵を持っていない。

お前たちはどうだ？恩恵を持っているか？

戦う力はやる、策もやる。

信長と豊久の言葉を合わせたならばこうなる。

生き汚く、冒険者を汚く罵っていた民衆の目を覚ますにはそれだけで十分であった。

戦えないから、冒険者に守ってもらうしかない。

守って貰えると信じていたからその言葉が嘘だと激昂した。

しかし、豊久たちは【神の恩恵ファミリア】を受けていない。

彼らがファミリアを名乗っていないことから、神が彼らに恩恵を感じ

しないことから明らかなことだ。

「正義なんぞ、俺にはなか」

エレボスが豊久に聞いた。

アルフィアを傍につけて首を落とされるのを回避して。

その返答はエレボスですら予想しえなかったもの、豊久の頭には首をとることくらいしかない。

それしかない、それしかないと自分に強いている、それが豊久という薩摩兵子、功名餓鬼である。

「首置いてけ、なあ。お前、大将首だろう？ 大将首だろうお前」

神殺し、そんなことで彼は止まらない。

大将首が目の前にいる、それだけが彼の原動力になっている。

尊厳がなくとも飯があれば人は生きられる。

飯がなくとも尊厳があれば人は耐えられる。

だが、両方なくなるともはやどうでもよくなる。

もはやなんにでも頼る。

散々一向一揆にやられた手、信長の経験則。

シヤクティに会った、彼女は選んでいた。

死者の尊厳よりも生きている者の明日を望んだだけ。

そんなものわかつていた、リオンは尊厳に齧り付いていただけである。

その尊厳にしがみついて、執着して、友人^{アーディ}の死を受け入れていたつもりであった。

「あなたはっ……っ！」

「なんじゃ」

赤色の甲冑、刻まれた十字の家紋。

あの日、見たものだ。

闇派閥の本拠点だった、あの子が死んだ場所に彼はいた。腕を組んでリオンの後ろに佇んでいた。

「あなたは、なんで戦っている」

「首のため」

「首？」

意味がわからない。

目の前の男のことなど全く知らない、知れるはずもない。

「ロキ・ファミリア」と接触していた、その上で作戦を、考えを他に全く漏らさなかった。

だから、アーディは死んだ。

そう思っただけに恨みの視線を向ける。

「俺は後にも先にも突っ走ることしか知らん。お前も同じじゃないか」

「突っ走ることしか、知らない？」

「応、戦えんなら下がれ。女子供は後ろにおれ」

見下されていない、ただ自分の答えを目の前の女に言っているだけ。

豊久としては女や子供が戦場を走るのを見るのは嫌だ。

自身の価値観でモノを測り、そのまま口を利く。

至極、空気を読まない。

否だろうが、空気を読もうとしていないだけなのだろう。

「……ふざけるな」

「ふざけてなどおらん」

「ふざけているだろうっ！」

分かっている、これはただの八つ当たりだ。

ふざけていないことなど男の顔を見れば分かる。

「娘は死んだ。友が死んだ。ならなんでお前は応報せん」

「応報？ そんなこととしては私の正義は」

「せねばならん。お前が誰であろうと仇は討たねばならん」

仁王立ち、腕を組んでリオンの前を封じている。

選択を強いている、目の前の女は危ないと本能的に察しているのだろうか。

目が危ない、今のままでは戦士としてでは無く女としてめそめそ死んでいく。

「今のお前は畜生だ。こいは戦ぞ、心に迷いのある者からまつさきに死ぬ。貴様のことで」

「畜生だと？・迷い、」

リオンはその言葉を理解する。

それがそのまま自分のことを表していることを理解してしまう。
怒りを向ける、剣を向ける先を見失う。

ただ、剣を握っているだけで刃先を豊久に向けているだけ。

「豊久さん。北西部で怪しい動きが……、ってその人は？」

「なんじゃあ『アストレア・ファミリア』の団員らしいぞ」

「『アストレア・ファミリア』？ああ、件の家出娘」

もう一人増える。

黒髪の美少年、弓を携えた女にも見える男。

「ふあるな、なぞ俺は知らん。それで女子供も兵になれるらしいの」
気に入らん、そう豊久は締めくくる。

それに与一は何も言うことなく笑って応える。

「帰つど、信が呼んどるんじやろ」

「待ちなさいっ！」

「あとは貴様の決めることじゃ。もう俺の言うことはなか」

豊久は身を翻して廃墟から出ていく。

与一もそれについていき、リオンはただ一人そこに置いていかれる。

毒気を抜かれたと剣をしまつてリオンもまた廃墟を出ていく。

「リオンッ！」

血を滴らせた剣を手に、後ろから聞こえた知り合いの声に振り返る。

復讐ではなく仇討ち、友を、民衆を殺した奴らへの、そう切りかえて闇派閥を潰そうと剣を握り直した。

「アンドロメダ」

「やつと見つけましたっ！力を貸してください！」

「エレボスの所在、ですか？」

「その手伝いを頼みたいのです！市壁で存在を主張していますが敵幹部がいるのは恐らく、」

「分かっています。手伝いしましょう」

幹部がいるのは地下、下水道を利用している。

リオンでもその程度は想像がついた。

しかしながら、そんな彼女らを邪魔するのはもれなく閨派閥である。

彼女らの二つ名を叫び、首級をあげよと襲いかかってくる。

明確な答えなど持てない、リオンにはそんなものなどない。

今は確かに民衆たちの仇討ちを変わりに執行する、自身の仇討ちを遂行してみせると心を高ぶらせる。